

平成二十七年 度

豊島岡女子学園中学校

入学試験問題

(二回)

国語

注意事項

- 一. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二. 問題は から 、2 ページから 19 ページまであります。
合図があつたら確認してください。
- 三. 解答は、すべて指示に従って解答らんに記入してください。

□

次の文章を読んで、後の一から十二までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

生物進化の仕組みにもとづいて、人間の心の働き(喜怒哀楽の感情や、ものの見方や考え方など)を探究する学問分野が「①進化心理学」です。進化心理学では、生物の心理(たとえば恐怖感情)が行動(逃げる、戦う)にAハンエイされて、その生物がうまく生き残りつづけたという、過去の歴史を問題にします。つまり、生物の心理や行動は、生物進化の歴史と対になっていると考えるのです。

人間の心理や行動は、他の動物にくらべてかなり複雑ですので、生物進化によって画一的に説明するのは難しいと思われるがちです。それはもともな指摘なのですが、複雑と思われた心理的側面が、生物進化で説明されると意外にやさしく理解できることがあるのです。代表的な例として「恐怖症」(恐怖感情がこうじた病的な状態)を考えてみましょう。

高所恐怖症のような恐怖症は、②怖がる必要がないのにもかかわらず、強い恐怖の心理的状态になってしまう症状です。高所恐怖症がすすんで、ビルの三階よりも上に行くともう足がすくんで動くこともできないとなると、かなりの重症です。では、どうして高所恐怖症のような、問題となる症状が存在するのでしょうか。

人間の歴史を考えてみてください。三階よりも上の高さが安全になったのは、ごく最近の文明社会での特別なできごとです。私たちの祖先は、高い所を回避することで、その環境のなかで生き残る確率をあげてきました。とつぜん環境が変わったからといって、高所の恐怖感情が一夜に消失するわけではないのです。

高所恐怖症は、昔は病気でもなんでもなかった少し強い心の傾向が、文明社会の環境におかれたとたんに、なんと病気にさせられてしまったという、不幸な事態なのです。

たしかに③文明社会では、環境の安全面や衛生面が向上し、一部の恐怖感情は余計なお荷物になっていると言えます。しかし、

そもそも恐怖感情は、進化の過程でむしろ過剰になるようにデザインされてきたのです。そのほうがリスク管理上、④都合がいからです。

へビに対する恐怖で考えてみましょう。私たちは茂みに太い紐が落ちていたら、へビではないかと反射的に警戒します。恐怖感情はすばやく反応して危険を回避してこそ、生活上役に立ちます。へビなのか紐なのかよく見て判断していたら、ほんとうにへビであったときに対応が間にあいません。ですから、紐であってもまずはへビであるとして対処し、あとからじっくり見極めるようにします。すなわち、とりあえず過剰に恐怖する仕組みになっていたほうが生き残りやすいのです。

過剰に恐怖する「こわがり屋」は、現在の私たちの日常生活では、臆病な弱虫などと笑われかねないのですが、生物の歴史のうえでは、生き残るための賢い知恵なのです。「こわがり屋」は、へビに似た紐にだまされやすい傾向をもちますが、そうした「だまされる仕組み」があったほうが生活に有利だったと言えます。だまされてビックリすることの不利もあるでしょうが、あとから「紐だったのだ」と確認できれば、不利益もごくわずかです。だまされるけど、だまされつづけない⑤「だまされ上手」が、いちばん賢いのです。

どうでしょうか。こうしてみると恐怖症は、「だまされ上手」な人間がうまく生き残ってきたことの、ひとつの現れなのではないでしょうか。恐怖感情にかぎらず、人間には、いろいろな「だまされ上手」の側面が進化していると考えられます。

では、恐怖にまつわる一連の行動のあいだ、脳のなかでどのような処理が行なわれているのでしょうか。

霊長類(人間を含めたサル仲間)の進化の研究では、感情にかかわる仕組みは歴史が古く、よく見て判断するような合理的な思考は歴史が浅いと考えられています。⑥チンパンジーなどの、人間の類縁動物を見ると、感情的な行動は多いけれど、合理的な思考にもとづいた行動は少ない気がします。

じつはチンパンジーでも、高度な合理的思考をたびたび行なっていることが知られています。しかし、それでも人間には遠くおよびません。合理的思考は、人間に近い進化の過程で充実してきたものと思われれます。

この事態は、最近の脳科学の知見でも裏づけられています。感情をつかさどる脳の部分は、おもに頭部の中心位置に納められている、脳幹や大脳辺縁系などの古い脳であり、合理的思考をつかさどるのは、脳の表面にあたる大脳皮質であるとされています。大脳皮質はチンパンジーや人間で飛躍的に発達している、進化の歴史では比較的新しい脳です。

恐怖などの感情の高まりは、「古い脳」ですばやく起動します。ヘビや「⑦」のような事物を目撃したら、すぐに「古い脳」が「えたいの知れないものがあるぞ」といった、大ざっぱな識別をして反応するのです。そして少し遅れて「新しい脳」が、「ほんとうに危険なものかどうか」の緻密な判断をくだします。それが紐であるとか、枯れススキであるとかと判断されれば、身体が整えた危機への準備態勢は解除されるのです。

人間の精神活動において、二つの過程（反射的過程と熟考的過程）が並行して動作している点は、かねてより、思考を研究する認知科学者たちによって指摘されてきました。現在それが、「古い脳」と「新しい脳」といったかたちで、脳の神経科学と接続し、発展のきざしを見せています。

二つの過程は、人間の意思決定のような高度な精神活動でも、重要になります。たとえば、買うべきか買わざるべきかを決める購買行動では、商品の印象的な魅力は「古い脳」によって、商品の長期的な利便性や安全性は「新しい脳」によって処理されると思われます。両者の判断が同じ結果をもたらせば問題ないのですが、私たちの日常を見るとそうでもなさそうです。年末大バーゲンなどで飾りつけられたショーウィンドウを見るとつい買ってしまうのも、⑧人間の本性と言えましょう。

人類が生きてきた数百万年の間、私たちは恐怖などの感情をひき起こす脳のシステムによって生きのびてきたのでしょう。一方で、生活の安全性が増した今日の文明社会では、多くの恐怖感情が不要となっている気もします。ところが、私たちの現代的な意思決定の際にも、そうした感情が⑨重要な役割を果たしている可能性が指摘されているのです。

合理的な思考というのは、思考に使える知識や情報が豊富にあればあるほど、Bサイゲンなく思考の時間が必要となります。何かひとつアイデアを思いついても、それに隠れた問題点はないだろうか、もつとほかによいアイデアがないだろうかと考えはじめると、えんえんと時間がたってしまいます。

脳科学者のアントニオ・ダマシオは、合理的な思考を感情がガイドしているとして、ソマティック（身体的）マーカー仮説をCテイショウしました。「新しい脳」によって合理的だと判断されても、「そちらの方向に考えすぎると危険だ、やめておこう」といった具合に、思考のところで「古い脳」の感情的な働きが介入するというのです。

永世名人のタイトルを獲得した棋士の羽生善治さんは、将棋のアマチュアではえんえんと多数の手筋を考えてしまう局面を前にして、彼の場合には必要な手筋だけが頭に浮かぶと報告しています。考える前から、おのずと不要な手筋が捨てられているかのようです。

さらに、羽生さんが詰将棋を解くときの脳を断層撮像装置で調べますと、まさに「古い脳」が大きく活動していることがわかりました。この知見だけでは、かならずしも恐怖感情を利用しているとは断定できませんが、将棋の手筋のような論理的な思考に「古い脳」が活用されて、すばやく効率的な判断がなされているのは確かです。

すなわち私たちには、感情をやつかいものと排斥するのではなく、⑩現代社会に合ったかたちで感情を働かせることが望まれているのです。言いかえれば、恐怖感情が適度に「だまされて」発動することが、かえって賢い脳の使い方につながるのです。理由もなく「何かおかしいぞ」というときは、「古い脳」が「新しい脳」にサインを出していると考えられます。熟考よりも「直感」や「感情」に頼って判断することは、案外正しいのかもしれない。

〔注〕 * 断層撮像装置Ⅱ物体の内部構造を断面図として撮影するための装置。

（『だまされ上手が生き残る』 石川 幹人）

問一 線A「ハンエイ」・B「サイゲン」・C「テイシヨウ」を正しい漢字に直しなさい。

(二画一画でいいにはつきりと書くこと。)

問二 線①「進化心理学」とはどのようなものですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 進化と心理とを関連付けることで、生物が心理的にも進化を遂げてきていることを説明する学問。

イ 過去の歴史的な問題は、生物の心理的な作用が行動につながることで起こっていると考ええる学問。

ウ 生物が生き残ってきた過程には、生き残らせるための心理的な作用が働いていたととらえる学問。

エ 生物の行動が喜怒哀楽の感情に影響を与えているという、行動と心理を結びつけた進歩的な学問。

オ 生物進化の歴史の複雑な発達段階を、心理的な側面から説明することで単純化しようという学問。

問三 線②「怖がる必要がなくなってしまう」とありますが、それは感情のどのような働きによって起こると筆者は考えていますか。最も適当な言葉を本文中から十字で探し、抜き出しなさい。

問四 線③「文明社会」とありますが、ここでの「文明社会」とはどのような社会ですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 必要以上に人間の恐怖感情をおおった結果、過度な恐怖を感じさせ病気にしてしまう異常な社会。

イ 安全化が進んだことで、本来生きる上で必要な恐怖感情をも病気と見なすようになった特異な社会。

ウ 進化の過程で生き残っていくために、様々な恐怖感情を新しく生み出してしまった病的な社会。

エ 本来は必要のないものにまで恐怖を感じることで、結果安全に生きられるようになった特殊な社会。

オ 急激に変化していく環境と元のままの人間の感情との差が大きくなってしまった急進的な社会。

問五 線④「都合がいい」とありますが、なぜ「都合がいい」のですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 恐怖はとっさに抱くからこそ瞬時の判断に結びつくので、何に対しても過剰に反応することが結果として危険に対する判断能力も向上させることになるということ。

イ 危険性というものはどのようなものに潜んでいるかは未知数なので、どのような対象にも過剰な恐怖感情を抱いている方が危険を回避する術となるということ。

ウ 対象が何であるかを考えていたら危険を回避できないので、とっさに現れたものはとりあえず危険性のあるものだととらえて逃げておいた方が安全だということ。

エ 危険と思うものには何にでも恐怖を抱く方が、いちいち対象を見極めるよりも瞬時に判断でき、結果として危険を回避できる可能性が高くなるということ。

オ 恐怖感情は過剰になるようにデザインしておく方が、いざという時に恐怖に対して対応できる慣れが生じ、結果としてその人を生かすことになるということ。

問六 線⑤「『だまされ上手』が、いちばん賢いのです」とありますが、なぜそう言えるのですか。その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア だまされてもずっとだまされているのではなく、自分がだまされていることに気づくことができるから。

イ だまされることには不利益もあるが、驚きをもって生活するという刺激に変えることができるから。

ウ だまされた場合の不利益は事実そうであった場合に比べはるかに小さく、その方が生存に有利だから。

エ だまされることで過剰に恐怖しているように見えるが、生き残るために意図して行っていることだから。

オ だまされることには、臆病であるがゆえに生き残ってきた人間の知恵を見て取ることができるから。

問七 ―線⑥「チンパンジー」とありますが、ここで「チンパンジー」を取り上げることによって筆者は何を言いたいのですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 合理的な思考が、進化上人間に近い種で新たに発展してきたものであるということ。
 イ チンパンジーも人間と同様のレベルで合理的な思考をおこなっているということ。
 ウ 人間に近い近縁種はすべて感情的な行動の方が思考による行動よりも多いということ。
 エ チンパンジーが他の動物に比べてはるかに人間に近い種であるということ。
 オ 人間と同様の合理的な思考は、他の種では人間には遠く及ばないということ。

問八 空らん「⑦」に入る適当な語を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 幽霊 ゆうれい イ 毒グモ ウ 盗人 ぬすこ エ 稲妻 いなずま オ 虹 にじ

問九 ―線⑧「人間の本性」とは、ここではどのようなことですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 買いたいという欲求に対しそれを制止する脳の働きは勝てないということ。
 イ 買うという決定をするのは新旧二つの脳の判断の一致によるということ。
 ウ 「古い脳」が決めたことは「新しい脳」でも変えられないということ。
 エ 「古い脳」よりも「新しい脳」のほうが買う決定をしているということ。
 オ 「新しい脳」と「古い脳」とが同じ判断になることばかりではないということ。

問十 ―線⑨「重要な役割を果たしている」とありますが、筆者はどのような点で重要な役割を果たしていると考えていますか。この後の部分から六字で探し、抜き出しなさい。

問十一 ―線⑩「現代社会に合ったかたちで感情を働かせる」とありますが、筆者はこれをどのように考えていますか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 現代の社会においても昔からの恐怖感情を発動させていくことで、変化していく社会の中でも変わらない人間の特性を持つて生きていくのが良いということ。

- イ 現代社会にはかつてのような危険はまったくと言っていいほど存在しないが、恐怖感情を抱かせることで万が一の場合にも備えることができるということ。

- ウ 現代の社会においては恐怖感情を過剰に抱かなくとも安全な生活を送ることができるが、そのような感情の働きをうまく利用することが望まれるということ。

- エ 現代の社会は感情を不要なものだと考えているが、必ずしも合理的判断を妨げるわけではないので、感情を適度に持つことで豊かな生活を期待するということ。

- オ 現代社会においては感情ではなく合理性に基づき判断するべきだが、人間である以上感情に左右されることは避けられないので、そのコントロールが大切だということ。

問十二 本文において、筆者は人間の脳の働きについて現代社会では何が重要だと考えていますか。「新しい脳」「古い脳」という言葉を必ず用いて九〇字以内で答えなさい。

② 千波と恵は、瀬戸内海にある因島で暮らす中学生である。同じクラスの二人は、一緒に下校することも多い。
次の文章を読んで、後の一から十二までの各問いに答えなさい。

島は平坦な土地がすくないから、海ぞいの道から一步はずれると、すぐに勾配のきつい坂道になる。そんな坂道ぞいに「A」網のようにはりめぐらされた路地に、肩を寄せあうように間口のせまい家々がならんでいて、恵とたわいのない話に笑い興じながらネコのようにあつちの路地、こつちの路地とたどるのが楽しくてしかたない。歩きたび、へえー、こんなところにこんな道があったのかと発見がある。そんなとき海は見えない。遠くにひびく船のエンジン音で海を感じるだけだ。歩きつかれて「B」目をあげたとき、山並みのようにかさなった島々のふもとにシルバー色にかがやくせまい海を見つけると、どちらかが大発見でもしたように、かならず声をあげる。

「海じゃあ」

いつのまにか古い長屋がむかいあわせに建っている一角にはいりこんでいた。ひとの足でふみかためられた、土の道の感触がなつかしい。きれいにほうきの目がおった道の脇には、①色とりどりの花のプランターがならび、それでなくてもせまい道を、なおせまくしていた。板塀ごしにのぞくと、まだ明るいのに裸電球がともっていた。中からテレビの音と老人のしわぶきがもれてくる。こんな家にはぶ子は弁当をくばっていたのかもしれない。

（一日中ひとりの家でわたしの持つていく弁当だけを楽しみにまっとうよ）

千波は、のぶ子の嘆きの意味がようやくすこし理解できた気がした。

「いろんなひとの、いろんな暮らしがあるねえ」

②ちょうど千波が感じたと同じことを恵がつぶやいた。恵って不思議。千波が心で思ったことを、まるで読んだように先に言葉にすることがある。そのたび、千波は感動する。やっぱりうちらは心でつながってる！

（中略）

「おなかすいたあ」

つぶやく千波に、

「寄っていく？」

恵は自分の家の方角を指さした。

「うん！」

恵の家をたずねるのは、ひさしぶりだった。

「チョコ、元氣イー」

庭先につながれた飼犬のチョコが、ふさふさのしっぽをメトロノームみたいにふってむかえてくれた。うしろの土が、まるくはいたようにきれいになった。

「おじゃまします」

③はいつてともいわれないうちから、千波は居間にあがりこんだ。恵の家は、なんだかなつかしいにおいがした。郵便局と名のはいった貯金箱だの、めくられないままの日めくりだの、ごちゃごちゃと物があふれているのも、逆に落ち着く。行儀が悪いとは知りつつ、千波は好奇心いっぱいであたりを見まわした。部屋の隅のソファの上に、派手な色あいのブラウスやスカートが乱雑にぬぎ散らされていた。なるほど、のぶ子の趣味とはだいぶちがう。でも恵のお母さんだったら似あうと思うけどなあ。

「おばちゃんは？」

「えーと、今日は準夜勤だ。夜中に帰ってくる」

台所でごそごそしている恵が、カレンダーに目をやりながら答えた。

「あいよ」

さほどまたないうちに、テーブルの上におにぎりが置かれた。中からおかかと梅干がのぞいている。

「すごい、恵。自分でつくったん？」

「ほかにだれかいますか？」

千波はつまみ食い専門の自分はずかしくなった。

「いったきまあす」

塩のきいているところ、そうでないところと多少ムラがあつたけれど、手でにぎったおにぎりはコンビニのおにぎりどちがつてあたたかくて、ふんわりお米が立っていた。口にいれるとほわりとくずれる。

「うまい！」

口いっぱいにはおぼる千波に恵は、

「いっぱいお食べ」

と満足そうにうなずいた。

「千波、もう進路決めた？」

唐突にたずねられた。恵の質問はいつも唐突だ。

「うーん、まだ」

千波の答えを期待するというよりは、自分にいいことがある様子の恵は、

「うちね。……きゃー、どうしよう。いおうかな、やっぱやめようかな」

一応もったいぶったあげく、だれにもいわんでよと、念をおしながら語りはじめた。

「お父さんの病室のまえに、リハビリの部屋があるんじゃないけど、その理学療法士の先生がめっちゃええひとでね、患者さんの話をいつも嫌がらんと、よう聞いてあげるし、めっちゃやさしいんよ」

いつもより「④」恵に、なんだかイヤな予感がした。おにぎりから顔をあげると、恵のほおは、さくら色に染まっていた。目は千波をとおりにして、どこか遠いところをさまよっている。

「このあいだ廊下ですれちごうたら、『お父さん孝行ですね』って声かけられたんよ。めっちゃうれしかった」

恵はひとりであって、ひとりで照れて、バシバシテーブルをたたいた。

——なに、恵。ひよつとして、恋をしてるとか？

恵のテンションの高さについていけない千波の心臓の鼓動が速くなった。⑤どくどくと耳の中でまでひびく。

「藤田先生、その先生、藤田先生ゆうんじゃないけど、お父ちゃんによると、まだ若いのにめちゃめちゃ仕事熱心で、その熱心さにはだされた患者さんが、藤田先生をよろこばせたい一心でリハビリをがんばるんじゃない。その結果、『もうどうなってもええ』ゆうてあきらめとった患者さんまでが、ようなって退院していくんじゃない。これって、スゴイ思わん？」

恵の話の中身よりも、千波は自分の心に起こった変化にとまどっていた。ぞわぞわぞわ。胸が不快にさわぎ立てる。これって、ひよつとして嫉妬？

「じゃけえ、うちもいつかは藤田先生みたいに理学療法士になって、ひとをはげましたいんよ。いまはまだ自分のことで精一杯じゃけど」

恵の瞳はいつもの数倍かがやきを増していた。見ているのがつらくて、千波は口のあたりに視線をそらせた。

「じゃけど……」

なにか否定的なことをいってやりたい衝動がおさえきれなかった。とうとう口をひらいた。

「⑥医系ってすごいお金がかかるが」

「そうなんよ。問題はそれよ。じゃけど、うちはゼツタイあきらめんけえね。いつかゼツタイ夢をかなえる！」

きりりと表情を引きしめた恵は、高らかに千波にむかつて宣言した。

② 千波と恵は、瀬戸内海にある因島で暮らす中学生である。同じクラスの二人は、一緒に下校することも多い。次の文章を読んで、後の一から十二までの各問いに答えなさい。

島は平坦な土地がすくないから、海ぞいの道から一步はずれると、すぐに勾配のきつい坂道になる。そんな坂道ぞいに「A」網のようにはりめぐらされた路地に、肩を寄せあうように間口のせまい家々がならんでいて、恵とたわいのない話に笑い興じながらネコのようにあつちの路地、こつちの路地とたどるのが楽しくてしかたない。歩きたび、へえー、こんなところにこんな道があったのかと発見がある。そんなとき海は見えない。遠くにひびく船のエンジン音で海を感じるだけだ。歩きつかれて「B」目をあげたとき、山並みのようにかさなった島々のふもとにシルバー色にかがやくせまい海を見つけると、どちらかが大発見でもしたように、かならず声をあげる。

「海じゃあ」

いつのまにか古い長屋がむかいあわせに建っている一角にはいりこんでいた。ひとの足でふみかためられた、土の道の感触がなつかしい。きれいにほうきの目がおった道の脇には、①色とりどりの花のプランターがならび、それでなくてもせまい道を、なおせまくしていた。板塀ごしにのぞくと、まだ明るいのに裸電球がともっていた。中からテレビの音と老人のしわぶきがもれてくる。こんな家にはぶ子は弁当をくばっていたのかもしれない。

（一日中ひとりの家でわたしの持つていく弁当だけを楽しみにまっとうよ）

千波は、のぶ子の嘆きの意味がようやくすこし理解できた気がした。

「いろんなひとの、いろんな暮らしがあるねえ」

② ちょうど千波が感じたと同じことを恵がつぶやいた。恵って不思議。千波が心で思ったことを、まるで読んだように先に言葉にすることがある。そのたび、千波は感動する。やっぱりうちらは心でつながってる！

（中略）

「おなかすいたあ」

つぶやく千波に、

「寄っていく？」

恵は自分の家の方角を指さした。

「うん！」

恵の家をたずねるのは、ひさしぶりだった。

「チョコ、元氣イー」

庭先につながれた飼犬のチョコが、ふさふさのしっぽをメトロノームみたいにふってむかえてくれた。うしろの土が、まるくはいたようにきれいになった。

「おじゃまします」

③ はいってともいわれないうちから、千波は居間にあがりこんだ。恵の家は、なんだかなつかしいにおいがした。郵便局と名のはいった貯金箱だの、めくられないままの日めくりだの、ごちゃごちゃと物があふれているのも、逆に落ち着く。行儀が悪いとは知りつつ、千波は好奇心いっぱいであたりを見まわした。部屋の隅のソファの上に、派手な色あいのブラウスやスカートが乱雑にぬぎ散らされていた。なるほど、のぶ子の趣味とはだいぶちがう。でも恵のお母さんだったら似あうと思うけどなあ。

「おばちゃんは？」

「えーと、今日は準夜勤だ。夜中に帰ってくる」

台所でこそそしている恵が、カレンダーに目をやりながら答えた。

「あいよ」

さほどまたないうちに、テーブルの上におにぎりが置かれた。中からおかかと梅干がのぞいている。

「すごい、恵。自分でつくったん？」

「ほかにだれかいますか？」

千波はつまみ食い専門の自分がはずかしくなった。

「いったきまず」

塩のきいているところ、そうでないと多少ムラがあったけれど、手でにぎったおにぎりはコンビニのおにぎりと同じであたたくて、ふんわりお米が立っていた。口にいれるとほわりとくずれる。

「うまい！」

口いっぱいにはおぼる千波に恵は、

「いっぱいお食べ」

と満足そうにうなずいた。

「千波、もう進路決めた？」

唐突にたずねられた。恵の質問はいつも唐突だ。

「うーん、まだ」

千波の答えを期待するというよりは、自分にいいことがある様子の恵は、

「うちね。……きやー、どうしよう。いおうかな、やっぱやめようかな」

一応もったいぶったあげく、だれにもいわんでよと、念をおしながら語りはじめた。

「お父さんの病室のまえに、リハビリの部屋があるんじゃないけど、その理学療法士の先生がめっちゃええひとでね、患者さんの話をいつも嫌がらんと、よう聞いてあげるし、めっちゃやさしいんよ」

いつもより「④」恵に、なんだかイヤな予感がした。おにぎりから顔をあげると、恵のほおは、さくら色に染まっていた。目は千波をとおりにして、どこか遠いところをさまよっている。

「このあいだ廊下ですれちごうたら、『お父さん孝行ですね』って声かけられたんよ。めっちゃうれしかった」

恵はひとりであって、ひとりで照れて、バシバシテーブルをたたいた。

——なに、恵。ひよつとして、恋をしてるとか？

恵のテンションの高さについていけない千波の心臓の鼓動が速くなった。⑤どくどくと耳の中でまでひびく。

「藤田先生、その先生、藤田先生ゆうんじゃないけど、お父ちゃんによると、まだ若いのにめちゃめちや仕事熱心で、その熱心さにはだされた患者さんが、藤田先生をよろこばせたい一心でリハビリをがんばるんじゃない。その結果、『もうどうなってもええ』ゆうてあきらめとった患者さんまでが、ようなって退院していくんじゃない。これって、スゴイ思わん？」

恵の話の中身よりも、千波は自分の心に起こった変化にとまどっていた。ぞわぞわぞわ。胸が不快にさわぎ立てる。これって、ひよつとして嫉妬？

「じゃけえ、うちもいつかは藤田先生みたいに理学療法士になって、ひとをはげましたいんよ。いまはまだ自分のことで精一杯じやけど」

恵の瞳はいつもの数倍かがやきを増していた。見ているのがつらくて、千波は口のあたりに視線をそらせた。

「じゃけど……」

なにか否定的なことをいってやりたい衝動がおさえきれなかった。とうとう口をひらいた。

「⑥医系ってすごいお金がかかるが」

「そうなんよ。問題はそれよ。じゃけど、うちはゼツタイあきらめんけえね。いつかゼツタイ夢をかなえる！」

きりりと表情を引きしめた恵は、高らかに千波にむかって宣言した。

「ああ、やっといえたあ。これで安心。だれかに宣言しとくと、⑦夢は夢のうなるゆうもんね」
恵は⑧水からあがったようなさつぱりとした表情を見せた。さつぱりしないのは千波だ。

「うちはどうなるん？ 置いてきぼり？」

心でつながっているとついこんでいた恵の心がはなれていこうとしているさびしさが胸をさす。

「どしたん、千波。ポケットとして」

魂のぬけたようになっていた千波にようやく気づくと、恵は腕をのばしてテーブル越しに千波のおでこを突つづいた。千波の頭は、⑨まるで張子の虎のように、こくこくゆれた。

「もう、こんなとにご飯つぶまでつけて」

しょうのない子ですなえといいたげに、恵はほっぺたのご飯つぶをつまんで、あいたままの千波の口に放りこんだ。その大人っぽいしぐさが、よけいに千波の心を逆なでした。もう、やめてよ。

〔注〕 * しわぶきⅡせき。せきばらい。

* のぶ子Ⅱ千波の母。以前、高齢者に弁当を届ける仕事をしていた。

（『明日につづくリズム』 八束 澄子）

問一 空らん「A」・「B」に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | | | |
|-----|-------|---|-----|-----|-------|---|-----|-----|-------|---|-------|
| ア A | しつかりと | B | ぱつと | イ A | びつしりと | B | ふと | ウ A | すつきりと | B | ぼんやりと |
| エ A | どつしりと | B | そつと | オ A | きつちりと | B | さつと | | | | |

問二 線①「色とりどりの花のプランターがならびくおせまくしていた」とありますが、この描写から読み取れる暮らしとして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自然との触れ合いを大切にしている古風な暮らし
イ 花の世話に追われるきゆうくつな暮らし
ウ あふれる花を整理できない乱雑な暮らし
エ 明るい戸外で花を育てて楽しむ豊かな暮らし
オ 道幅を一段と狭めて来客を拒む閉鎖的な暮らし

問三 線②「ちようど千波が感じたと同じこと」とありますが、「千波が感じた」内容として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 島をめぐるうちに、様々な生活の風景がある中で、薄暗い家にこもり他人とほとんど接しない孤独な暮らしがあることを実感し、特に胸に迫るものがあつたということ。
イ 豊かな自然を大切にしている生活もあれば、電球やテレビに依存し自然と触れ合おうとしない生活もあるという生活の多様さを感じ、特に胸に迫るものがあつたということ。
ウ 同じ島にもかかわらず、坂道沿いの家や古い長屋などに住む人々が、自分たちとは異なる生き方をしていることを知り、特に胸に迫るものがあつたということ。
エ 島を探索する中で、通ったことのない道や感動的な海の様子など新しい風景を発見し、そこで暮らす人々の色々な生活を想像し、特に胸に迫るものがあつたということ。
オ 板塀の内をのぞき、一人暮らしの老人が来客を楽しみに待ち続けているという母の言葉に込められたさびしさに改めて気づき、特に胸に迫るものがあつたということ。

問四 ー線③「はいってともいわれないうちから、千波は居間にあがりこんだ」とありますが、千波がこのような行動をとれた理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 久しぶりに恵の家に来てなつかしさでいっぱいになるあまり、冷静さと自制心を失っているから。

イ マナーのなさを自覚しつつも、念願だった恵の家で遊べることのうれしさから浮かれているから。

ウ 恵の母の都合は確認していないが、恵の親友の自分なら許されるだろうと一家の厚意に甘えているから。

エ ひさしぶりに訪れた恵の家ではあったが、心の通った友人に対する気安さから遠慮をしていないから。

オ 普段恵から家族の話も聞いており、親近感を持っているため、勝手知ったる家だと感じているから。

問五 空らん「④」に入る言葉として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 強引な イ ていねいな ウ 乱暴な エ 小声の オ 早口の

問六 ー線⑤「どくどくと耳の中でまでひびく」とありますが、このときの千波の様子として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いつもと様子が異なる恵が何を考えているのか図りかね、動揺している様子

イ 恵が千波を見放すようなことを言うのではないかと身構え、緊張している様子

ウ 進路の話ではなく恋の相談を始めた恵の本心が理解できず、戸惑っている様子

エ 千波が話の内容に加わりうとしてもそのたびに恵に拒絶され、いらだっている様子

オ 恵が恋に夢中になっている様子を見、藤田先生に激しく嫉妬し、憎悪する様子

問七 ー線⑥「医系ってすごいお金がかかるが」とありますが、この指摘は千波と恵とで異なる意味を持ちます。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 千波は、恵を思いとどまらせ、もう一度心が通った状態に戻りたいため指摘したが、恵にとっては指摘されたくない事実であり、千波に反抗した。

イ 千波は、恵の夢に対する否定的な内容であれば何でもよかったが、恵にとっては唯一の重要な問題であり、指摘されて悩みを再確認していた。

ウ 千波は、素直に恵の夢に賛成する気になれず問題点を指摘したが、恵にとっては越えていくべきハードルであり、決意を固めていった。

エ 千波は、恋に浮かれていた恵の目を覚まさせるために現実的な忠告をしたが、恵にとってはすでにわかっていることであり、その気遣いに感謝した。

オ 千波は、恵の力ではどうにもならない条件を考えて発言したが、恵にとっては楽観的な内容であり、指摘されてもまるで気にしなかった。

問八 ー線⑦「夢は夢でいうなるゆうもんね」とありますが、恵の夢の説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 仕事熱心で患者から頼られる藤田先生のように、自分の仕事に一途な理学療法士になること。

イ 熱意で患者を動かす藤田先生のように、他人の心を前向きにできる理学療法士になること。

ウ 恵にも声をかけてくれる藤田先生のように、誰にでも優しくふるまえる理学療法士になること。

エ 恵のことまでよく見ていた藤田先生のように、するどい観察眼を持つ理学療法士になること。

オ 患者の話し相手をつとめる藤田先生のように、人をはげます技術のある理学療法士になること。

問九 ―線⑧「水からあがったようなさっぱりとした表情」とありますが、恵はどのような表情になったのですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 今まで一人で抱えていたものを千波に打ち明けたことで気持ちの整理がつき、迷いのない表情になった。

イ 千波が自分の決意を最後まで聞いてくれたことで夢がかなうことを確信し、安心した表情になった。

ウ 夢をかなえるという約束をしあったことで決意が固まり後に引けなくなったため、力強い表情になった。

エ 千波に反対されるかと案じていたが反対の言葉がなかったため気が楽になり、爽やかな表情になった。

オ 誰よりも話しかかった千波にとうとう打ち明けられたことがうれしく、希望に満ちた表情になった。

問十 ―線⑨「まるで張子の虎のように」とありますが、これは千波のどのような様子を表していますか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ぼんやりしていたのを恵に注意され動揺する様子

イ さびしさを隠し元気そうに取りつくろう様子

ウ 空虚感から気持ちが入らずされるがままの様子

エ 恵に無視をされ続けた不満から無気力にふるまう様子

オ うなずくという行動とつらい気持ちが一致しない様子

問十一 □で囲まれた本文末尾の三行『もう、こんなとこに飯つぶまでつけて』『もう、やめてよ。』で描かれる千波と恵についての説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 恵は夢を共有できた千波に親近感を表しているが、千波は、今まで心が通じ合っていたはずの恵に裏切られたと思い深い悲しみを感じている。

イ 恵は放心状態の千波を心配し世話を焼くことに満足感を覚えているが、千波は、恵を応援するどころか心配されてしまっている自分の情けなさを感じている。

ウ 恵は普段と変わらず千波をからかっているが、千波は、恵の中に自分を子どもだと見下す気持ちがあることに気が付き、いらだちを感じている。

エ 恵は自分のことばかり話してしまった気まずさから千波に干渉しているが、千波は、恵の話を聞くうちに芽生えた不快感が強まったのを感じている。

オ 恵はいつも通り親しげに振る舞っているが、千波は、恵の家で交わされたやりとりを通して抱いた二人の間にある隔たりの感覚をより強く感じている。

問十二 この文章の説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 会話を多用することで、千波と恵の心情が詳しく表され、将来について悩む二人の様子が繊細に描かれている。

イ 美しい海と島のにぎやかな風景を描写することで、島で育つ千波と恵の将来が明るいことが印象的に暗示されている。

ウ 「肩を寄せ合うように」「張子の虎のように」など比喻を用いることで、千波の感性の豊かさが表現されている。

エ 会話の際、千波の言葉が減少し恵の台詞ばかりになることによって、千波と恵の心のずれが効果的に表されている。

オ 藤田先生が恵の言葉の中にしか登場しないことで、子どもの千波と大人の藤田先生という対照が客観的に示されている。

受験番号

平成二十七年 豊島岡女子学園中学校入学試験

国語解答用紙(一回)

※らんには記入しないこと

氏名

得点

一

問一

A

B

C

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

問十一

問十二

二

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

問十一

問十二

※

※

※

※

※